

## 織田作之助『木の都』の授業ノート

### －現代文分野における「大阪の文学」の教材として－

みやがわ やすし  
宮川 康

**抄録：**織田作之助の『木の都』は四つの物語を重層的に構成することで成立しており、「詩情をたたへた、美しい物語」という大方の評価も、その構成から生まれる。ただし、初出のテキストを参照すると、太平洋戦争下の「生活の更新」というもう一つの主題が見えてくる。

**キーワード：**近代文学、大阪、無頼派、太平洋戦争、文学教育

#### はじめに

本年度は第3学年の『国語探究』（学校設定科目）2単位のうち、その現代文分野1単位を担当した。（古典分野の1単位は他の教員が担当した。）私事になるが、稿者は本年度が、定年退職後の再雇用5年目となり、本校勤務18年の最後の年となる。そこで、稿者が大学在学中以来細々と専門的に研究対象としてきた、織田作之助の作品を、少なくとも専任教員としては最後の現代文分野の授業として、その柱の一つにしようと考えたわけである。1学期のすべての授業を織田作之助と『木の都』にあてた。全10回である。

もちろん、織田作之助の作品は、いままでも何度か投げ入れ教材として取り上げてきた。今回取り上げた『木の都』（1944年）とともに『馬地獄』（1941年）は稿者の織田作之助授業の定番であったと言っていい。『馬地獄』の教材化については、30年ほど以前に前任校の紀要にその報告を書いている。<sup>\*1</sup>

『木の都』を授業で取り上げるようになったのは、1998年に日本近代文学会の全国大会で「織田作之助『木の都』論」を発表してからである。当時の稿者には、その発表内容はそのまま論文として公表するには、不具合な点があるように思われ、文章化しないままで現在に至った。<sup>\*2</sup> 稿者が行ってきた『木の都』の授業の骨子はこの学会発表の内容におおむね基づいてきた。今回この稿を起すに当たって、学会発表の原稿を探し出し、それをもとに文学研究論文として作成しようと考えたが、四半世紀前のことゆえ、書架の雑本に紛れて容易に見つけることができず、起稿準備開始も遅きに失したため、研究論文の形にすることは断念した。とはいえ、いわゆる教科教育の実践報告の体裁にすることは、稿者の苦手とするところである。やむをえず、本年度

行った授業に用いたノートの内容をここに記録し、もし織田作之助の小説を授業で取り上げようというような、稿者にとってまことにありがたい後進の方がおられるのなら、幾許かでもお役に立ちたいと考えた次第である。

むろん、前述のように本年度が最後の年となる稿者にとっては、この『木の都』の授業は、国語教師としての総仕上げの意味が、ないでもなかった。そこで、いままで何回か行った本教材の授業内容を再度検討して、今回初めて取り入れた読解も随所にある。その点でも、ここに「授業ノート」を記録することの意味はあると感じている。ただし、そのような新しい読解は、授業展開とともに考えつつ組み込んでいったもので、この「ノート」がまとまった研究論文のような整合性に欠ける点があるのは否めない。いわば、この「ノート」は、まさに実際の授業展開の内容をその順序のままで記述したものである。

なお、もちろん管見において、現在のところ『木の都』を掲載している検定教科書はないと思われる。ただ、教科書の体裁で本作を掲載しているものとして『大阪の文学（近現代編）』（1997年3月28日大阪府教育センター）があり、稿者の授業では、その部分コピーを用いることとしてきた。ただ、このテキストは一般的に流布しているとは言いがたいし、実際現在手に入れることは非常に困難である。<sup>\*3</sup> したがって、本稿の『木の都』のテキストは、本作の初刊本を直接の底本としている岩波文庫『夫婦善哉正統他十二篇』（2013年7月17日岩波書店）を用いることとした。テキストからの引用語句に付した[ ]内の頁行もそれに従っている。

また、以下に記す「授業ノート」（Ⅰ～Ⅶ章）においての各章は、ほぼ授業1～2回分に相当する。

## I. 織田作之助『木の都』を読むために

### i). 織田作之助について

作品を読む前に、その作家についての紹介に1時間（あるいはそれ以上）の授業をあてるのが、稿者の通常である。ここでは、授業でも参照した、織田の没後70年の際に稿者が新聞に寄稿した文章（「ぶんかのミカタ 織田作之助 没後70年<sup>①</sup> したたかに、人間を描く」2017年2月23日『毎日新聞』夕刊）を抄録することとする。

織田作之助死して、七十年が経つ。大阪に住んで大阪を舞台にした小説を書き続けた彼は、死の前年の昭和二十一年、『世相』や『競馬』の好評をきっかけに、敗戦から一年足らずで流行作家となっていた。無理な原稿注文をこなすためにヒロポンを常用し、持病の肺結核を悪化させる。戦後宝塚や京都に移りしても関西を離れなかった織田が、「読売新聞」に『土曜夫人』を連載し勢い込んで東京に乗り込んだのは十一月。太宰治や坂口安吾と交流する。その年の十二月五日未明に大咯血し、翌る一月十日に亡くなった。満三十三歳と三か月足らず。夭折と言ってもいい。

太宰と坂口と織田は、後に「戦後無頼派」と呼ばれた。たしかに彼らの文学が大きく注目されることになったのは戦後である。しかし、彼らの文学活動の出発点は戦前であり、織田に限れば、彼の小説創作期間は昭和十三年に小説を初めて発表してから実質九年。そのうち八年間は戦時下であった。代表作とされる『夫婦善哉』『わが町』『木の都』『蛭』など、すべて戦時下の作。織田は戦時下の作家である。

以前織田について書いた拙文の一つに、「織田作之助は青春の作家である」と題したことがある。青春は夭折と書きかえてもいい。あえて言うなら、織田の青春はつねに夭折に裏打ちされていた。昭和十三年三月十二日の日記に、彼は「忘れていた 忘れていた、／やがて死ぬ身であることを、」と書きつける。（中略）織田の青春は人生と同義であり、人生はまた文学と同義であった。それは文学に人生を、青春を賭けた挑戦者でありつづけることであった。絶筆評論『可能性の文学』は実のところその中間報告とでも言うべきものであったろう。横光利一の『純粹小説論』の影響を受けつつサルトルなどを引きあいに出して、文学は人間を描くものだと主張する。織田の挑戦とは、いかに人間を描くかを問い続けることであった。

国家総動員法が制定された昭和十三年に織田の

小説創作は始まる。彼の人間を描く小説は検閲による三度の処分を受けた。人間を描くための舞台を織田は大阪にとる。大阪は商人の町である。とは、つまり現実肯定の町であり、人間肯定の町であった。頼りない夫を芸で支える『夫婦善哉』の蝶子も、その夫柳吉も、俸夫一筋で娘や孫を育てあげる『わが町』の他あやんも、人生を賭けと見て自尊心に執着する『青春の逆説』の豹一も、すべて大阪で生まれ、生きていた。ところでまた、大阪は才覚に富んだしたたかな町でもある。織田の小説創作は戦時下という文学の自由を奪われた状況にあって、権力の目をかい潜りつつ人間をいかに文学になしえるかという作家生命をも賭した実験であった。

（後略）

### ii). 『木の都』の書誌

織田作之助の『木の都』は1944年3月1日新潮社発行の『新潮』第41巻3号に発表され、1946年1月10日三島書房発行の単行本『猿飛佐助』に初めて収められた。その後『夫婦善哉』（1947年3月25日大地書房）、『織田作之助選集第一巻』（1947年10月1日中央公論社）、新潮文庫『競馬』（1950年1月25日新潮社、三版より『夫婦善哉』に改題）等多くの単行本に収められ、1970年4月25日講談社発行の初めての個人全集『織田作之助全集』（第5巻）に収められる。その後も多くの文学全集、単行本、文庫本等に収められている。

稿者は『大阪近代文学事典』（2005年5月20日 和泉書院）で担当した「織田作之助」の項目において、『夫婦善哉』（1940年）、『わが町』（1943年）と並べて、『木の都』を主要作品の一つとしておいた。本作は現在、織田の戦中期を代表する作品の一つとしての地位を与えられているといえよう。

ただ、この書誌事項を見て、注意すべきは、本作が戦中に発表された作品でありながら、単行本に収められたのが戦後であり、その後の刊本に収められたテキストはすべて、初刊本である『猿飛佐助』のテキストを底本、またはそれを底本にしたテキストを底本にしている、という点である。この点はこの小説の読解において少なからぬ意味を持っているのだが、後の章で詳述することにした。

## II. 〈語る「私」〉／〈語られる「私」〉

読解を始める前に、まず小説を構成する小段落に番号をふってみる。小段落は全部で26ある。冒頭から①～②⑥の番号をふると、それぞれあとの[ ]内の範囲となる。書き出しの数語を抜き出してお

く。

以後の論述においてテキストの語句を抜き出す場合、その初めに置かれた①～②⑥はその語句が含まれる小段落を表している。

- ①[p. 3331. 1～]大阪は木のない都だと
- ②[1. 3～]それは、生国魂神社の境内の
- ③[1. 8～]試みに、千日前界隈の
- ④[p. 3341. 1～]そこは俗に上町とよばれる
- ⑤[1. 10～]路地の多い——というのは
- ⑥[1. 15～]口縄（くちなわ）とは大阪で
- ⑦[p. 3351. 13～]その頃、私は高津宮跡にある
- ⑧[p. 3361. 7～]ところが、去年の初春、
- ⑨[p. 3371. 5～]登り詰めたところは路地である。
- ⑩[1. 13～]下駄屋の隣に薬屋があった。
- ⑪[1. 16～]善書堂という本屋であった。
- ⑫[p. 3381. 6～]その善書堂が今はもうなくなって
- ⑬[1. 14～]店の中は薄暗かった。
- ⑭[p. 3401. 1～]何枚かのレコードを購めて
- ⑮[1. 6～]京都の学生街の吉田に
- ⑯[p. 3411. 3～]主人はもと船乗りで、
- ⑰[p. 3421. 8～]帰ろうとすると、また雨であった。
- ⑱[1. 14～]半月余り経ってその傘を返しに
- ⑲[p. 3431. 7～]帰り途、ひっそりと黄昏れている
- ⑳[1. 11～]その日行ったきり、再び仕事に
- ㉑[p. 3451. 8～]ところが名曲堂へ行ってみると、
- ㉒[p. 3461. 6～]この父親の愛情は私の胸を
- ㉓[1. 13～]冬が来た。新坊がまたふらふらと
- ㉔[p. 3471. 5～]年の暮は何か人恋しくなる。
- ㉕[p. 3481. 3～6]口縄坂は寒々と木が枯れて、

この小説の語り手は「私」と名乗っているが、⑧「去年の初春」[p. 3361. 7]に⑦「故郷の町」[p. 3361. 2]を歩き始める登場人物もまた「私」である。この小説には〈語る「私」〉と〈語られる「私」〉という二通りの「私」が存在することになる。つまり、この小説はいわゆる〈私小説〉の構造を持っているといえる。もしも自然主義小説以来の〈私小説〉のルールにしたがうことができるならば、〈語る「私」〉が小説の外にいる作者自身と同一人物であるとして、この「私」はこの小説が書かれたと考えられる、1944年、昭和19年の1月、あるいは遅くとも2月の時間にいることになる。すると、〈語られる「私」〉が登場する「去年」とは1943年、昭和18年となる。

そのような、語りの構造のもとで、〈語る「私」〉は、この小説において、それぞれ中心人物の異なる

四つの物語を語っていくのである、そして、それらの物語が折り重なることで一つの「小説」という構造体を形作る。以下に、それぞれの中心人物の時間を追うことで、四つの物語の流れを確認する。小説の展開に沿って、それぞれの物語の時間の流れを表現している語句を抜き出してみる。

### Ⅲ. 小説の構造

#### i). 物語A＝去年の「私」の物語

〈語られる「私」〉は⑧「去年の初春」から登場し、小説の末尾の㉕「年の暮」[p. 3471. 5]までが〈語る「私」〉によって語られていく。Ⅱの考察にしたがって、小説外の現実の時間を導入するなら〈昭和18年の初春～年の暮〉の物語ということになる。この〈語られる「私」〉の物語を以後、〈去年の「私」の物語〉＝物語Aと呼ぶことにする。物語Aの時間は次のように進行していく。矢印は時間の流れを表す。

- ⑧去年の初春
- ↓
- ⑮十日ほど経って[p. 3401. 15]
- ↓
- ⑱半月余り経って[p. 3421. 14]
- ↓
- ㉑夏が来ると[p. 3441. 2]
- ↓
- ㉒秋の虫[p. 3441. 13]
- ↓
- ㉓十日ばかり経って[p. 3461. 6]
- ↓
- ㉔冬が来た。[3461. 13]
- ↓
- ㉕年の暮

#### ii). 物語B＝過去の「私」の物語

物語Aは⑧「去年の初春」から始まるが、語り手が「私」と呼ぶ人物は小説の冒頭から登場する。それは語り手自身であり、ここで〈語る「私」〉と呼んでいる存在である。あたかもこの作品がエッセイであるかのごとく、語り手は「私」自身のことを語っていく。小説の冒頭から①「私の幼時の記憶」[p. 3331. 1]として語り始めるのである。そして、物語Aが開始されることによって、〈語る「私」〉は〈語られる「私」〉でもあったことに、読者は初めて気づかされる。この冒頭から登場する〈語る「私」〉を〈語られる「私」〉として見るときの、その「私」を中心人物とした物語は、①「私の幼時」から

⑦「その後私はいくつかの作品でこの町を描いた」[p.3361.3]（つまり、作家となった）という、これも小説外の現実の時間を導入するなら、〈大正の中頃～昭和17年頃〉の物語として⑧「去年の初春」に接続することになる。ただし、この物語は、物語Aが開始されても、時間的には順不同で、散発的にエピソードが語られることになる。それもあわせて、この物語を一つの物語と見るとき、それを〈過去の「私」の物語〉＝物語Bと呼ぶことにする。物語Bの時間は次のように進行する。

①私の幼時の記憶

↓

④上町に育った私たち[p.3341.1]

↓

⑥年少の頃の私[p.3351.2]

↓

⑦高津宮跡にある  
⑪尋常六年生の私[p.3381.3]  
⑫尋常六年生の私[p.3381.3]

↓

⑦京都の高等学校[p.3351.13]

↓

⑦京都の高等学校[p.3351.13]  
⑧中学生の私[p.3361.11]  
⑫中学校へはいると[p.3381.3]

↓

⑦京都の高等学校[p.3351.13]  
⑮京都の学生街の吉田[p.3401.6]  
⑫中学校へはいると[p.3381.3]

↓

⑦京都の高等学校[p.3351.13]  
⑯京都にいた時分[p.3441.16]

↓

⑦その後私はいくつかの作品でこの町を描いた

↓

⑱二年前[p.3451.2]

iii). 物語C＝「矢野名曲堂」の「主人」の物語

この小説には、一般に〈主人公〉と位置づけられるであろう「私」のほかに、「矢野名曲堂」[p.3381.7～8]の3人の家族が登場する。「主人」「新坊」「娘さん」と呼ばれる親子である。ここではこの家族を〈矢野一家〉と呼ぶことにする。この小説の中にある物語は、上に述べた物語A・Bの「私」の物語のほかに、この〈矢野一家〉の物語が存在する。その一つがこの〈「矢野名曲堂」の「主人」の物語〉＝物語Cである。この物語は、小段落⑩でまとめて語られる。しかし、時間の幅はこれが最も大きい。「主人」の⑩「子供の頃」[p.3411.3]から⑩「五十三」

[p.3421.1]までの、これも現実の時間で考えると〈明治30年代～昭和18年初春〉の物語ということになる。物語Cの時間は次のようなものである。

⑩子供の頃から欧州航路の船に雇われて

↓

⑩四十の歳に陸へ上って[p.3411.4]

↓

⑩大阪へ引越す時[p.3411.10]

↓

⑩私もまだ五十三です

iv). 物語D＝「新坊」の物語

物語Cを「主人」が「私」に語り終わって、その直後に小説に登場するのが、「主人」の息子の「新坊」である。ここで初めて「私」は「新坊」と出会うのだが、そこから、この小説は「私」が「矢野名曲堂」を訪ねるたびに、「新坊」の動静を知るという展開となる。「私」が訪ねるたびに変化していく「新坊」の身の上は、それ自体〈「新坊」の物語〉＝物語Dを形成すると考えることができる。むろんこの物語に対応する現実の時間は、〈昭和18年初春（ただし⑧の10日後）～年の暮〉ということになる。物語Dの時間は次のように進行する。

⑩こんど中学校を受ける[p.3421.4]

↓

⑩新聞配達にしました[p.3431.1]

↓

⑩名古屋の工場へ徴用されて[p.3441.8]

↓

⑩工場に無断で帰って来たのだ[p.3451.10]

↓

⑩三日にあげず手紙が来る[p.3461.8]

↓

⑩ふらふらと帰って来て[p.3461.13]

↓

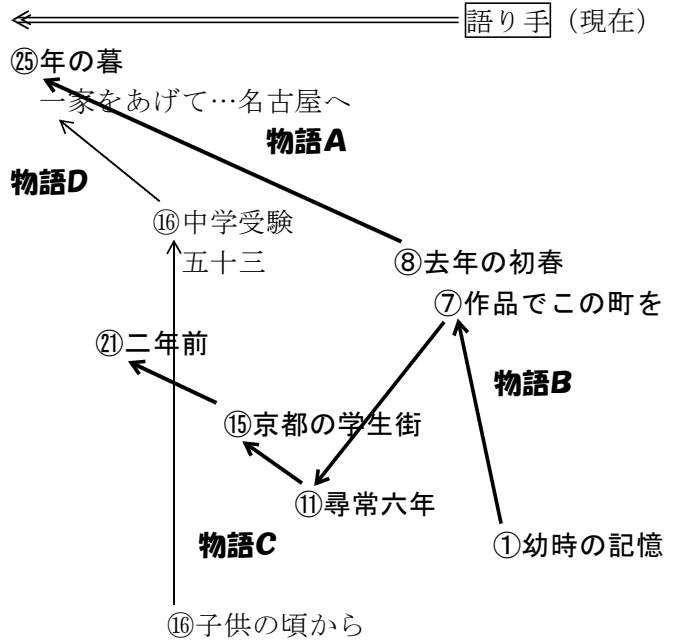
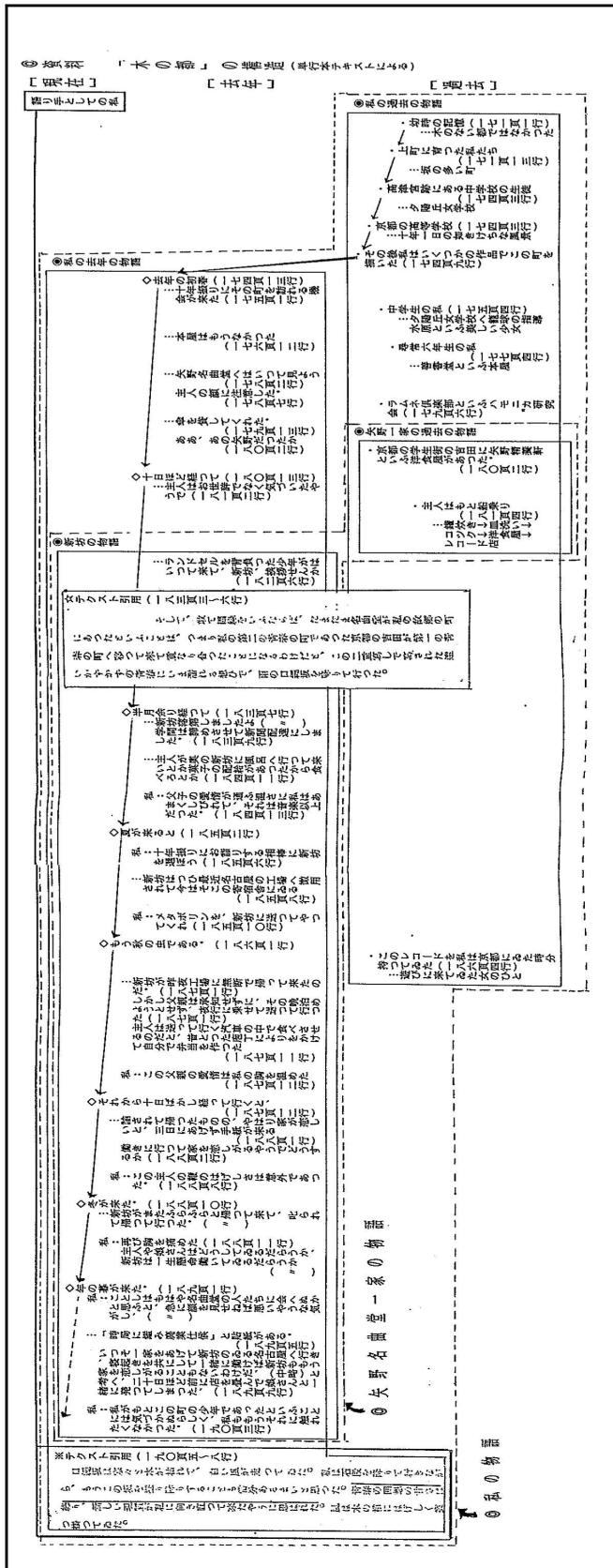
⑩一家をあげて新坊のいる名古屋へ行き[p.3471.12]

v). 四つの物語から見た小説の構造

小説の進行を横軸に置き（右→左）、時間の流れを縦軸（下→上）において、四つの物語の相互関係を小説のテキストの引用を重ねて図示すると図1のようになる。（なお、この図は、学会発表した当時のレジュメからの抜粋であるので、ここに記した頁行は初刊本『猿飛佐助』のものである、授業時このまま配布している。）



図1 四つの物語の相関関係



ゴシック体にした〈物語B⇒物語A〉を〈私の物語〉、明朝体の〈物語C⇒物語D〉を〈「矢野名曲堂」一家の物語〉と呼ぶこともできよう。

さて次に、このような構造が、この小説の読解において、どのような役割を担うのか、を考えてみたい。

#### IV. 小説の構造の意味

##### i). 『木の都』の読まれ方

ここで、上記のような構造をもった『木の都』が現在まで、どのように読まれてきたか、どのように評価されているか、に触れておきたい。

この作品については、近年いくつかの論文が提出されているが、稿者が学会発表をおこなった1998年の時点では、まとまった作品論はほとんどなく、作品解説の類がいくつかあるばかりであった。主だったものを年代順にあげてみる。(下線は稿者、本稿のすべての引用文における線引きも同様である。)

⑦中央公論社出版部「後記」(1947年12月1日『織田作之助選集第一巻』中央公論社)

作中の「私」は作者自身ではなく、「私」について述べられた事柄をそのまま作者自身に当てはめ得るものとしては必ずしも信をおきがたいと云ふ点が一般の私小説とは異なる。作の調子は回顧的であり、戦争の中で大阪にあって孤独な作家生活をつづけてみた作者の古き大阪へのノスタルジアが色濃く漂ふ一篇。

①青野季吉「解説」(1950年1月25日『競馬』(新潮文庫)新潮社)

これを簡略化して、さらに図示すると、次のようになる。

その切ない心願が直接にはつきり出てゐるのは、「木の都」である。この作品はそれを別にしても、大阪の市なかの移り変りと、おそらく作者の自伝の一節であらうが、早くそこを離れ、ふたたびそこを訪れて感懐を寄せる主人公との、スખ一トな物語である。詩情をたたへた、美しい物語である。

㊦小松伸六「人と文学」（1967年3月10日『現代文学大系第四十四巻武田麟太郎島木健作織田作之助集』筑摩書房）

「木の都」は、自らの青春に思いをはせ、働きに出ている新坊のことを考える、これまた大阪讃歌の回顧的作品であり、美しさからいえば、織田作品のなかで、これがもっともすぐれている。

㊧増田周子「木の都」（1992年7月20日浦西和彦編『織田作之助文藝事典』和泉書院）

青春の地の思い出と名曲堂一家との触れ合いの中に作者の古き大阪に対する思いが感じられる佳作である。

これらの作品評に共通するのは、この小説が「大阪へのノスタルジア」を基調とする「詩情をたたへた、美しい物語」であるという点である。㊦に至っては「美しさからいえば、織田作品のなかで、これがもっともすぐれている。」などという手放しとも言える評価を与えている。そのように『木の都』は読まれてきたし、現在も読まれていると言っていい。

では、このような、いわば〈叙情的な美しい物語〉とでもいうような作品の印象は、どこから生まれてくるのか。それをⅢで見たと、四つの物語が折り重なる構造から明らかにしたい。これらの作品評に見られる作品の叙情性の具体的な表現としての「大阪へのノスタルジア」と「詩情をたたへた、美しい物語」という言葉を手がかりとして、この小説の〈叙情の来歴〉を考えてみる。

## ii). 叙情の来歴

### (a). 大阪へのノスタルジア

本作において「大阪へのノスタルジア」は具体的には「大阪」のどのようなこと／ものを対象にしているのか。またそれはどのようにして「ノスタルジア」として読者に読み取られるのか。

ここで、本作を、単に「私」を主人公とした小説と見て、その展開によって五つの大段落(1)～(5)に分けてみる。小段落①～⑳の番号でそれらの範囲を示し、さらにその内容を、「私」を主体として端的にまとめてみると、次のようになると考えられる。

- (1)…①～⑦去年以前の「私」
- (2)…⑧～⑫故郷への再訪
- (3)…⑬～⑮矢野名曲堂との出会い
- (4)…⑯～㉒矢野一家との交流
- (5)…㉓・㉔矢野一家との別れ

この展開の中で、「私」が「大阪へのノスタルジア」を感じている対象を探してみるのだが、その際の指標として、「私」の主観が明示されている語に着目してみる。

まず「私」の「ノスタルジア」を明瞭に示す語として「なつかしい」という語が「大阪」の何に対して使われているかを調べてみるのだが、実は、「なつかしい」という語の用例は、本作のテキスト全体で次の6例しかない。下の下線部がその用例である。

⑤坂の名を誌すだけでも私の想いはなつかしさにしびれるが、とりわけなつかしいのは口縄坂である。[p. 3341. 13～14]

⑥夕暮わけもなく坂の上に佇んでいた私の顔が、坂を上って来る制服のひとをみて、夕陽を浴びたようにぱっと赧くなったことも、今はなつかしい想出である。[p. 3351. 10～12]

㉑二年前その妹さんがどうして私のことを知ったのか、そのひとの死んだことを知らせてくれた時、私は取り返しのつかぬ想いがした。そんなわけでなつかしいレコードである。本来が青春と無縁であり得ない文学の仕事をしなから、その仕事に追われてかえってかつての自分の青春を暫らく忘れていた私は、その名曲堂からの葉書を見て、にわかになつかしく、久し振りに口縄坂を登った。[p. 3451. 2～7]

㉒ことしはもはや名曲堂の人たちに会えぬかと思うと、急に顔を見せねば悪いような気がし、またなつかしくもなったので、[p. 3471. 5～6]

上の6例のうち、小段落⑤⑥の3例は「大阪」の「口縄坂」を対象とするものであり、㉑㉒の3例はその「口縄坂」にある「矢野名曲堂」と、それに関わるものを対象とするものである。ただ、本作の「大阪へのノスタルジア」はその二つのもの、より単純化していえば「口縄坂」だけを対象にしているわけではなからう。

そこで、気づくのは、これら「なつかしい」という語が、使われている部分のうち、波線部にあるように⑤⑥㉑の用例には「想い」という語が伴っているということである。本作の「おもい」「おもう」の語は「想」「思」の2種類の漢字で書かれており、「想い」「想う」となっているものには「なつかしい」

という感情が伴っているのではないか。上にあげたもの以外の用例を確認すると、次のようになる。(②の部分のみ、破線部のように「思う」となっていることの考察はのちに行う。)

⑥年少の頃の私は口縄坂という名称のもつ趣きには注意が向かず、むしろその坂を登り詰めた高台が夕陽丘とよばれ、その界隈の町が夕陽丘であることの方に、淡い青春の想いが傾いた。[p. 3351. 2～5]

⑧それきり私は籠球部をよし、再びその校門をくぐることもなかった。そのことを想いだしながら、私は坂を登った。[p. 3371. 3～4]

⑫その善書堂が今はもうなくなっているのである。主人は鼻の大きな人であった。古本を売る時の私は、その鼻の大きさが随分気になったものだと想い出しながら、[p. 3381. 6～7]

⑫その老人は私に気づかず、そして何思ったか眼鏡を外すと、すっと奥へひっこんでしまった。私はすかされた想いをもて余し、[p. 3381. 10～12]

⑬中学校へはいるとラムネ倶楽部というハモニカ研究会に籍を置いて、大いに音楽に傾倒したことなど想い出しながら [p. 3391. 13～14]

⑭市電に乗ろうとした拍子に、畳んだ傘の矢野という印が眼に止まり、ああ、あの矢野だったかと、私ははじめて想い出した。[p. 34014～5]

⑮京都の学生街の吉田に矢野精養軒という洋食屋があった。かつてのそこの主人が、いま私が傘を借りて来た名曲堂の主人と同じ人であることを想い出したのである。もう十年も前のこと故、どこかで見た顔だと思いながらにわかに想い出せなかったのであるが、想い出して見ると、いろんな細かいことも記憶に残っていた。[p. 34016～9]

⑮それが皆学生好みの洋楽の名曲レコードであったのも、今にして想えば奇しき縁ですねと、[p. 34014～15]

⑫一晩も泊めずに帰ってしまったかと想えば不憫でしたが、という娘さんの口調の中に [p. 345114～15]

⑭そして、名曲堂のこともいつか遠い想いとなってしまって、年の暮が来た。[p. 3471. 3～4]

⑥の「想い」は「口縄坂」や「夕陽丘」、⑧の「想い」は「夕陽丘女学校」[p. 3361. 10]、⑫の二つの「想い」は「口縄坂」を登り詰めたところにある「故郷の町」、⑬の「想い」は「高津宮跡にある中学校の生徒」[p. 3351. 13]であった頃に、と、これらの「想い」は「口縄坂」周辺の〈「故郷の町」＝「大阪」〉へと向けられている。⑭⑮の「想い」は京都の「矢野精養軒」[p. 3401. 6]に対してではあるが、

やがて「故郷の町」の住人となる「矢野名曲堂」の一家の過去についてであり、⑭の「想い」はまさに「名曲堂」そのものに向けられている。⑫の「想う」は「大阪」に向けられたものではないが、これは「私」の感情を表現したものではない。

本作に使用されている「私」の気持ちを表現する「想い」「想う」の語は「私」の〈「故郷の町」＝「大阪」〉に対する「なつかしさ」を表現していると考えていだろう。それでは、そのような「想い」を抱く「私」とはどのような「私」か。先に置いた大段落に照らしてみると、(1)においては「私」は語り手として「故郷の町」を「なつかし」む。(2)以降は「私」は登場人物となるのだが、同時に語り手として「なつかし」く「故郷の町」について語るのである。Ⅲ章において、稿者はこのような「私」を中心人物とする物語を〈過去の「私」の物語〉＝物語Bと呼んでおいた。

『木の都』に「大阪へのノスタルジア」を読む場合、読者はこの小説に稿者のいう〈過去の「私」の物語〉＝物語Bを読んでいるのである。しかし、物語Bを読むだけでは、この小説は「詩情をたたへた、うつくしい物語」＝「スキートな物語」とはならないのではないか。この小説の〈叙情の来歴〉を辿るには、四つの物語として折り重なった他の物語の意味を考える必要があるはずである。

(b). 詩情をたたへた、うつくしい物語

先に指摘したように、本作の「おもい」「おもう」の語は「想」「思」の2種類の漢字で書かれている。「思い」「思う」の方の用例は、次のようなものである。(前項で引用した部分もあるが、論述の必要上重複して引用している。頁行も改めて付した。)

⑥藤原家隆卿であろうか「ちぎりあれば難波の里にやどり来て波の入日ををがみつるかな」とこの高台で歌った頃には、もう夕陽丘の名は約束されていたかと思われる。[p. 3351. 6～8]

⑧水原は指導選手と称する私が指導を受ける少女たちよりも下手な投球ぶりをするのを見て、何と思ったか、私は知らぬ。[p. 3371. 1～3]

⑨町の容子がすこしも昔と変っていないのを私は喜んだが、しかし家の軒が一斉に低くなっているように思われて、ふと架空の町を歩いているような気もした。[p. 3371. 9～11]

⑩桶屋の隣に標札屋があった。標札屋の隣に……(と見て行って、私はおやと思った。) [p. 3371. 14～15]

⑫私は挨拶しようと思って近寄って行ったが、その老人は私に気づかず、そして何思ったか眼鏡を外す



と、すつと奥へひっこんでしまった。私はすかさされた想いをもて余し、ふと矢野名曲堂へは行って見ようと思った。[p. 3381. 10~12]

⑬古い名曲レコードの売買や交換を専門にやっているらしい店の壁に船の浮袋はおかしいと思ったが、それよりも私はやがて出て来た主人の顔に注意した。はじめははっきり見えなかったが、だんだんに視力が回復して来ると、おや、どこかで見た顔だと思った。しかし、どこで見たかは思い出せなかった。鼻はそんなに大きくなく、勿論もとの善書堂の主人ではなかった。その代り、唇が分厚く大きくて、その唇を金魚のようにパクパクさせてものをいう癖があるのを見て、徳川夢声に似ているとふと思ったが、しかし、どこかの銭湯の番台で見たことがあるようにも思われた。[p. 3381. 16~p. 3391. 7]

⑭かつてのそこの主人が、いま私が傘を借りて来た名曲堂の主人と同じ人であることを想いだしたのである。もう十年も前のこと故、どこかで見た顔だと思いながらにわかに想い出せなかったのであろうが、想い出して見ると、[p. 3401. 6~9]

⑮ああ、あなたでしたか、道理で見たことのあるお方だと思っていましたが、しかし変られましたなど、主人はお世辞でなく気づいたようで、[p. 3401. 16~p. 3411. 1]

⑯たまたま名曲堂が私の故郷の町にあったということは、つまり私の第二の青春の町であった京都の吉田が第一の青春の町へ移って来て重なり合ったことになるわけだと、この二重写しで写された遠いかずかずの青春にいま濡れる思い<sup>\*4</sup>で、雨の口繩坂を降りて行った。[p. 3421. 111~14]

⑰女の子は女学校ぐらい出て置かぬと嫁に行く時肩身の狭いこともあろうと思って、娘は女学校へやったが、[p. 3431. 2~3]

⑱私は十年振りにお詣りする相棒に新坊を選ぼうと思った。[p. 3441. 6]

⑲部屋の中へ迷い込んで来る虫を、夏の虫かと思って団扇で敲くと、[p. 3441. 12]

⑳ふと家が恋しくなると、父や姉の傍で寝たいなと思うと、[p. 3451. 11~12]

㉑主人は私の顔を見るなり、新坊は駄目ですよと、思いがけぬわが子への苦情だった。[p. 3461. 6~7]

㉒ことしはもはや名曲堂の人たちに会えぬかと思うと、急に顔を見せねば悪いような気がし、またなつかしくもなったので、[p. 3471. 5~6]

㉓もう七十を越したかと思われる標札屋の老人はぼそぼそと語って、[p. 3481. 1~2]

㉔もうこの坂を登り降りすることも当分あるまいと思った。青春の回想の甘さは終り、新しい現実が私

に向き直って来たように思われた。[p. 3481. 4~6]

これらの「思い」「思う」のうち、⑧の『「思っ」た』、⑫の一つめの『「思っ」た』、⑮の二つめの引用にある『「思っ」て』、⑱の『「思っ」て』、㉒の「思う」は主体が「私」ではないので、ここでは考察の対象としない。その他は「私」を主体とする「思い」「思う」であるが、「想い」の語と同じ場面の中に登場する部分がよりその違いを明確にすると思われるので、⑫と⑮の二つの部分についてその漢字の使用の意味を考えてみる。

前項で見たように、「想い」には語り手としての「私」の「なつかしさ」が表現されていると考えられる。⑫の引用部分において「私」は「故郷の町」の「老人」に「挨拶しようと思って近寄って行った」のだが、「老人」は「奥へひっこんでしま」い、「すかされ」てしまう。「挨拶しよう」と「思っ」たのは、「去年の初春」にいる登場人物、つまり〈去年の「私」〉である、しかし、「挨拶しよう」という「想い」は、語り手としての「私」が〈過去の「私」〉を「想い」だして「故郷の町」を「なつかしい」と感じているものである。「すかされた」のは〈去年の「私」〉の抱いている〈過去の「私」〉の「想い」なのだと語り手は見ているのである。さらにその後で「ふと矢野名曲堂へは行って見ようと思った」のは、また〈去年の「私」〉なのである。

⑮の一つめの引用にある「想い」と「思い」の違いは、もう少し明瞭である。この部分に2例ある「想い」はどちらも「かつてのそこの主人が、いま私が傘を借りて来た名曲堂の主人と同じ人であることを」「想い」出すことを対象としている。これは、〈過去の「私」〉の体験を「想い」出すことである。一方、「主人」のことを「どこかで見た顔だ」と「思う」ことには「なつかしさ」は伴わない。単に〈去年の「私」〉が「思っ」ていることなのである。

以上のことから、これらの用例における「私」の「思い」について言えるのは、これらの「思い」が、〈過去の「私」の物語〉＝物語Bにおけるものではなく、〈去年の「私」の物語〉＝物語Aにおける中心人物である〈去年の「私」〉の「思い」を表現しているということである。

ここで、このような〈去年の「私」〉の「思い」の中で、特にこの小説の四つの物語の構造を考える上で、手がかりとなる「思い」があることに注目したい。⑰「私の第二の青春の町であった京都の吉田が第一の青春の町へ移って来て重なり合ったこと



ずの青春にいま濡れる思いで」とある、その「思い」のありようである。〈去年の「私」〉が「矢野精養軒」の「主人」、つまり「矢野名曲堂」の「主人」と出会って「思っ」たのは、この「二重写し」<sup>\*5</sup>の「思い」であった。ここで「二重写し」と「私」に受け取られているのは、「第一の青春の町であった京都の吉田」と「第一の青春の町」としての「故郷の町」である。つまり、「私」のこの「二重写し」の「思い」はこれ以後「故郷の町」にある「矢野名曲堂」の一家と関わりを持っていく〈去年の「私」の物語〉＝物語Aが「第二の青春の町であった京都の吉田」をも含みこむ〈過去の「私」の物語〉＝物語Bと重なり合うという、この小説の構造の特徴を示唆しているといえるのではないか。そして、そのような構造が、単にこの小説を「大阪へのノスタルジア」というだけにとどまらない「詩情をたたへた、うつくしい物語」に仕立て上げているのではないか。

しかし、この「二重写し」をこの小説が「詩情をたたへた、うつくしい物語」＝「スキートな物語」になるための仕掛けと見なすためには、「二重写し」の構造の内実をもう少し検討してみる必要がある。そこには四つの物語との関わりも見えてくるはずである。

## V. 四つの物語における「二重写し」

### i). 物語Aと物語B

上に見たように、この小説の構造のキーワードが「二重写し」であると考えてみて、その「二重写し」が物語Aと物語Bにあるとする。たしかに〈去年の「私」〉が登場する大段落(2)以降も物語Aの展開の中に、物語Bが、自然な時間の流れを無視するように、ところどころに顔を出してくることによって、それを「二重写し」と見なすことはできよう。しかし、「二重写し」というには、二つの物語の結びつきは、あまり密接なものには見えない。大段落(1)においては、物語Bの一人語りであり、(2)で物語Aが語り始められてからは、〈去年の「私」〉の行動の中に、まるでまさに「思い」出したように物語Bの〈過去の「私」〉が顔を出すだけである。

読者がこの小説の主たるストーリーと意識するのが物語Aであることは自明であろう。その物語Aに物語Bが「二重写し」になることによって、読者にこの小説が「詩情をたたへた、うつくしい物語」であると感じさせるとすれば、「大阪へのノスタルジア」を語る物語Bの〈叙情〉の影響は、もっとはっきりとしたものであるのではないか。この「二重写し」にはさらにまた異なった要素が必要なはずである。

### ii). 物語Aと物語C・D

この小説が「詩情をたたへた、うつくしい物語」であるために、物語Bの〈叙情〉を物語Aにもっと密接に媒介するものが必要なはずである。そこに物語C・Dを置くことができる。

とはいうものの、物語Cは四つの物語の中では、単独では小説の展開に直接は結びつかない物語であろう。物語Dとつながることで〈矢野名曲堂〉一家の物語〉としての意味を持ち、小説の中で機能すると考えられる。ここでは、特に物語Dに注目したい。

物語Aの〈去年の「私」〉は大段落(3)までは、「故郷の町」を訪れて、〈過去の「私」〉の「想い」とともに、「なつかしさ」に浸っているが、大段落(4)からは「矢野名曲堂」の一家と出会い、一家と交流をはじめめる。その中で〈去年の「私」〉はさまざまな「思い」を抱いていくことになる。その「思い」を抱かせるきっかけとなるのは、〈矢野一家〉であり「新坊」である。物語Aが〈「新坊」の物語〉＝物語Dと絡み合って展開していくのである。具体的に物語Dの展開（下線部）とそれをきっかけに抱く〈去年の「私」〉の「思い」（破線部）を引用してみる。

①新坊が帰って来ると私はいつもレコードを止めて貰って、主人が奥の新坊に風呂へ行って来いとか、菓子の配給があったから食べるとか声を掛ける隙をつくるようにした。奥ではうんと一言返辞があるだけだったが、父子の愛情が通う温さに私はあまくしびれて、それは音楽以上だった。[p. 3431. 14～p. 3441. 1]

②十年振りにお詣りする相棒に新坊を選ぼうと思った。そして祭の夜店で何か買ってやることを、ひそかに楽しみながら、わざと夜をえらんで名曲堂へ行くと、[p. 3441. 6～8]

③新坊が昨夜工場に無断で帰って来たのだ。（中略）しかし父親は承知せずに、その晩泊めようとせず、夜行に乗せて名古屋まで送って行ったということだった。一晩も泊めずに帰ってしまったかと想へば不憫でしたが、という娘さんの口調の中に、私は二十五の年齢を見た。（中略）凜とした口調の中に通っている弟への愛情にも、素直な感傷がうかがわれた。[p. 3451. 10～p. 3461. 3]

④主人は送って行く汽車の中で食べさせるのだと、昔とった庖丁によりをかけて自分で弁当を作ったという。／この父親の愛情は私の胸を温めたが、[p. 3461. 4～6]

⑤新坊がまたふらふらと帰って来て、叱られて帰って行ったという話を聴いて、再び胸を痛めたきり、

私はまた名曲堂から遠ざかっていた。主人や娘さんはどうしているだろうか、新坊は一生懸命働いているだろうか、時にふれ思わぬこともなかったが、そしてまた、始終来ていた客がぷつぷつ来なくなることは名曲堂の人たちにとっても淋しい気がすることであろうと気にならぬこともなかったが、[p. 3461. 13～p. 3471. 1]

物語Dは、物語Aの「私」にさまざまな「思い」を抱かせ、物語Aの展開を促す動因となっているといえる。それでは、なぜ物語Dは物語Aに対してそのような機能を持つのであろうか。そこにこの小説の四つの物語の中にある、もう一つの「二重写し」を見ることができるはずである。

### iii). 物語Bと物語D

次に物語Bと物語Dの関係を考察することで、本章の目的である、四つの物語によるこの小説の構造を考えるための、最後の要素を埋めようと思うのだが、その前に、その前提として、物語Aと物語Dの関係の密接さの理由を明らかにする必要がある。

つまり、物語Aの「私」はなぜ「新坊」の物語Dに、それほどまでにこだわるのか、ということである。「私」にとって「新坊」は、「故郷の町」でたまたま入った店の主人の子どもであるというのに過ぎない。その店の主人が学生時代に自分が通った食堂の主人と同一人物であり、それが奇遇に思っていたにしろ、だからといってその子どもである「新坊」に本作に見られるような愛着を「私」が覚える理由とはなるまい。初めて「矢野名曲堂」を訪ねて以来、テキストに書き込まれている以上に「私」が何度も店を訪れていることは、⑱「その後私は新坊が新聞を配り終えた疲れた足取りで名曲堂へ帰って来るのを、何度か目撃したが、新坊はいつみても黙って硝子扉を押してはいつて来ると、そのまま父親にも口を利かずにこそこそ奥へ姿を消してしまうのだった。」[p. 3431. 9～11]という一文からも察せられるが、かといって、⑳「七月九日は生国魂の夏祭であった。（中略）私は十年振りにお詣りする相棒に新坊を選ぼうと思った。そして祭の夜店で何か買ってやることを、ひそかに楽しみながら、わざと夜をえらんで名曲堂へ行く」[p. 3441. 5～8]というのは、そこに「新坊」に対する特別な「思い」が存在していると考えられる。そのような特別な「思い」はどこから生まれてくるのか。

その手がかりとして、⑱「新坊が帰って来ると私はいつもレコードを止めてもらって、主人が奥の新坊に風呂へ行って来いとか、菓子の配給があったか

ら食べるとか声を掛ける隙をつくるようにした。奥ではうんと一言返辞があるだけだったが、父子の愛情が通う温さに私はあまくしびれて、それは音楽以上だった。」[p. 3431. 14～p. 3441. 1]という、「主人」と「新坊」の関係に対する「私」の感情のありかたに着目したい。「私」はなぜ「父子の愛情が通う温さに」「音楽以上に」「あまくしびれ」るのであろうか。そこには、矢野の「父子」の側というより「私」の側にその要因があると考えられる。

「私」の側の要因は、〈過去の「私」の物語〉における次の部分に語られている。

⑦やがて私は高等学校在学中に両親を失い、ひいては無人になった家を畳んでしまうと、もうこの町とはほとんど没交渉になってしまった。天涯孤独の境遇は、転々とした放浪めく生活に馴れやすく、[p. 3351. 16～p. 3361. 2]

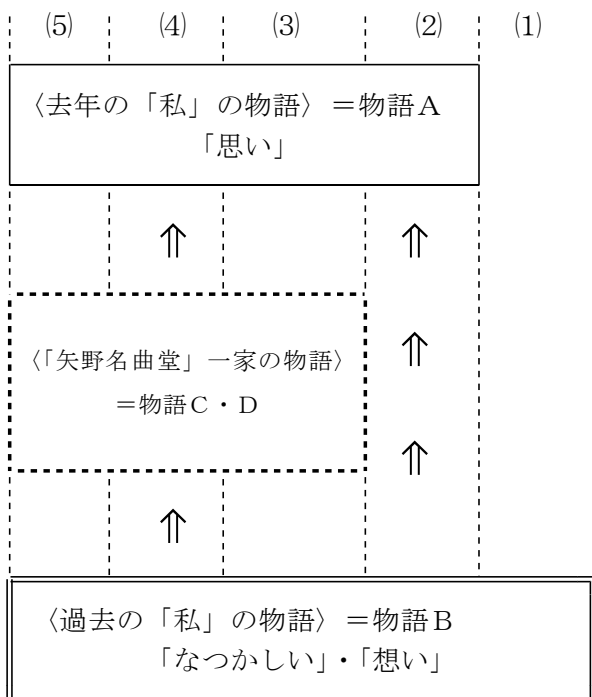
「高等学校在学中に両親を失」った「私」は「天涯孤独」となり「この町とはほとんど没交渉になって」いる。そのような「私」にとって、「父子の愛情が通う温さ」は、かつては何事もなく自らの掌中にあり、今はすでに失われて、そして失われてはじめて気づく、もはや永遠に取り戻せない「温さ」と感じられたのではないか。そして、そのような「私」の「思い」がこの「矢野名曲堂」の「父子」の上にも容易にかぶせられてしまうのは、㉔「私のもとこの町の少年であった」[p. 3481. 2～3]という「私」の意識があるからにほかならない。この小説が「詩情をたたへた、うつくしい物語」＝「スキートな物語」として読まれるのは、このような「私」の「思い」の構造を読者が物語の折り重なりの中に〈叙情〉的なものとして読みとるからであろう。

つまり、この小説において、〈去年の「私」の物語〉＝物語Aにおける「私」の「思い」は〈「新坊」の物語〉＝物語Dを動因として展開するのだが、その物語Dが物語Aに影響する背景には、〈過去の「私」の物語〉＝物語Bが存在し、そこに〈叙情〉が生まれる、ということである。物語Bと物語Dとの関係でいうのなら、この二つの物語は「故郷の町」を媒介として、まさに「二重写し」になっているのである。たとえば、その証左として、小説の展開において物語Bが大段落(3)（小段落では⑱）でほぼ語り終えられると、入れ替わるように物語Dが語り始められるということがあげられよう。（㉔の「京都にいた時分」、さらには「二年前」のエピソードが例外となるが、これは「京都」の話であり、「故郷の町」との関係は薄い。）

ここで、IV章のii) (a)に指摘しておいた⑮「ことしはもはや名曲堂の人たちに会えぬかと思うと、急に顔を見せねば悪いような気がし、またなつかしくもなったので、」について触れておきたい。この用例は〈去年の「私」〉の「思い」が「思う」という語で表現されている中で、IV章の論述に従えば、この小説の用字のルールであるはずの「想う」に結びつくべき「なつかしく」という語が使われているというものである。「なつかしい」は〈過去の「私」の物語〉において「大阪へのノスタルジア」を表現するための語句として意味づけたものであった。「なつかしい」の対象は「矢野名曲堂」である。ここで、⑭「そして、名曲堂のこともいつか遠い想いとなってしまって、年の暮が来た。」[p. 3471. 3~4]に「想い」の語が使われていることを考え合わせると、この小説の最終的な展開である大段落(5)に近づくことによって、本来物語Aの中で語られるはずの「矢野名曲堂」が物語Bの中に繰りこまれていっているということになるのではないだろうか。「矢野名曲堂」のエピソードそのものが、〈過去の「私」の物語〉の一部に変容していきつつあるように見える。

iv). 構造としての「二重写し」

本章で見てきたように、この小説は四つの物語（とくに物語A・B・D）が、重層的に重なる構造によって、「詩情をたたへた、うつくしい物語」＝「スキートな物語」となっている。この構造を改めて図示すると次のようになる。（小説の展開を右から左として(1)～(5)は大段落。）



この図に基づいて、再びこの小説の展開を述べるならば、以下のようになる。

大段落(1)ではまず物語Bが語り始められ、(2)になると「去年」というこの小説の主たるストーリーの時制が明らかにされ、物語Aが語られていく。物語Bは、(2)においては物語Aとは別の〈過去〉の時制において散発的に物語Aに入り混じるが、(3)で物語C・Dが始まると入れ替わるようになりをひそめる。しかし物語Bの「想い」は物語Dに「二重写し」にされることによって、(3)～(5)において物語Aの中に生かされて、この小説を「詩情をたたへた、うつくしい物語」＝「スキートな物語」に仕立て上げる。

VI. 小説の主題

i). 初刊本のテキストにおける主題

この授業では、『木の都』を初刊本『猿飛佐助』所収のテキストを底本とする岩波文庫『夫婦善哉正続他十二篇』に基づいて上のように読んできた。ここまでの読みに基づいてこの小説の主題を考えてみたい。

今までの読みでは、小説の構造を確認し、そこに〈叙情の来歴〉を突きとめようと試みた。小説の主題はこの〈叙情〉にあると見ることができよう。この〈叙情〉に寄与する要素として、本作に描かれた登場人物の人物像の描かれ方を確認しておく。

(a). 私

本作が〈私小説〉の形式をとっている以上語り手も「私」であるため、「私」の人物像は、小説内に描写や台詞によって積極的に造形されているわけではない。V章のii)に引用したように、「私」は「矢野名曲堂」一家の動静に対して、それを受動的に受け入れていく存在であり、その受け入れる「思い」がこの作品の〈叙情〉のありかたを具体的に表現しているわけである。

⑰「矢野名曲堂」の店内で「主人」「新坊」の「父子の愛情が通う温さ」を聞いては「あまくしびれ」、⑱「生国魂の夏祭」へ「お詣りする相棒に新坊を選ぼう」と思っては「ひそかに楽しみ」を覚え、⑳「新坊が昨夜工場に無断で帰って来た」のを語る「娘さん」に「素直な感傷」を感じ、また「新坊」を送っていく「主人」のようすに「胸を温め」、㉑「新坊がまたふらふらと帰って来て、叱られて帰って行った」ことに「胸を痛め」る「私」の「思い」のうつろいが、この小説の〈叙情〉を具体的に担う。人物造形ということ言えば、「私」は、〈親しく交わった他者への感情移入を素直に行う、比較的温和な人物〉とでもいうことになろうか。



ただ、IV章のii) (b)で引用した⑮「もうこの坂を登り降りすることも当分あるまいと思った。青春の回想の甘さは終り、新しい現実が私に向き直って来たように思われた。」という小説末尾の「思い」の強さだけは、これ以前の「私」の人物像に照らして異質に思われるのだが、このことについては、後に考察したい。

(b). 主人

「私」の「思い」を生み出していくのが、「矢野名曲堂」の「主人」「娘さん」「新坊」の3人の登場人物である。「私」とはちがい、この3人は（当然のことながら）語り手の「私」の視点で具体的に描かれる。とは言え、それほど多くの描写があるわけではない。その中で、最も造形の具体的なのが「主人」である。もちろん、小段落⑮で「主人」の半生は物語Cとしてやや過剰に本人の口から語られているのだが、その物語自体がまた、「私」による、「主人」の描写であるともいえるだろう。「主人」の人物像は、他にも台詞や描写によって次のように描かれる。

⑮主人はいやもう学問は諦めさせて、新聞配達にしましたとこともなげに言って、私を驚かせた。女の子は女学校ぐらい出しておかぬと嫁に行く時肩身の狭いこともあろうと思って、娘は女学校へやったが、しかし男の子は学問がなくても働くことさえ知っておれば、立派に世間へ通るし人の役に立つ、だから不得手な学問は諦めさせて、働くことを覚えさせようと新聞配達にした、子供の頃から身体を責めて働く癖をつけとけば、きっとまじな人間になるだろうというのであった。[p. 3431. 1~6]

⑯新坊が昨夜工場に無断で帰って来たのだ。（中略）しかし父親は承知せずに、その晩泊めようとせず、夜行に乗せて名古屋まで送って行ったということだった。（中略）しかし愛情はむしろ五十過ぎた父親の方が強かったのではあるまいか。主人は送って行く汽車の中で食べさせるのだと、昔とった庖丁によりをかけて自分で弁当を作ったという。[p. 3451. 10~p. 3461. 5]

⑰働きに行ったら家を恋しがらうのでどうするか、わたしは子供の時から四十の歳まで船に乗っていたが、どこの海の上でもそんな女々しい考えを起したことは一度もなかった。馬鹿者めと、主人は私に食って掛るように言い、[p. 3461. 8~11]

⑱新坊が家を恋しがって、いくら言いきかせても帰りがたがるので、主人は散々思案したあげく、いっそ一家をあげて新坊のいる名古屋へ行き、寝起きを共

にして一緒に働けば新坊ももう家を恋しがらうこともないわけだ、それよりほかに新坊の帰りがたがる気持をとめる方法はないし、まごまごしていると、自分にも徴用が来るかも知れないと考え、二十日ほど前に店を畳んで娘さんと一緒に発ってしまった、[p. 3471. 11~16]

⑲「子供の頃から身体を責めて働く癖をつけとけば、きっとまじな人間になる」と言う「主人」は一言で表現するならば〈苦勞人〉である。織田の小説にはこのような人生観の持ち主が多く登場する。その代表が小説『わが町』の「文句を言わずに、ただもうせえだい働いたら良えのや。人間は働くために生れて来たのや。」と話す主人公・佐渡島他吉、通称「他あやん」である。<sup>6)</sup>「主人」は⑳「工場に無断で帰って来た」「新坊」を「その晩泊めようとせず、夜行に乗せて名古屋まで送って行った」という〈厳しさ〉とともに「送って行く汽車の中で食べさせるのだと、昔とった庖丁によりをかけて自分で弁当を作る〈子ども思い〉の人情家である。

(c). 娘さん

作品読了後の印象は、「矢野名曲堂」一家の一員として決して希薄ではない「娘さん」であるが、実は彼女自身の具体的な描写は、作中に1か所しかない。

㉑二十五といえはやや婚期遅れの方だが、しかし清潔に澄んだ瞳には屈託のない若さがたたえられていて、京都で見た頃まだ女学校へはいったばかりであつたこのひとの面影も両の頬に残って失われていず、凜とした口調の中に通っている弟への愛情にも、素直な感傷がうかがわれた。[p. 3451. 15~p. 34613]

しかし、子細に見ると、何気ない「娘さん」の行動が、彼女の人柄が偲ばれるように述べられているのがわかる。

㉒七月一日は夕陽丘の愛染堂のお祭で、この日は大阪の娘さん達はその年になってはじめて浴衣を着て愛染様に見せに行く日だと、名曲堂の娘さんに聴いていたが[p. 3441. 3~5]

㉓ある日名曲堂から葉書が来た。お探しのレコードが手にはいったから、お暇の時に寄ってくれと娘さんの字らしかった。[p. 3441. 13~14]

㉔ところが名曲堂へ行ってみると、主人は居らず、娘さんがひとり店番をしていて、父は昨夜から名古屋へ行っているの、ちょうど日曜日で会社が休み

なのを幸い、こうして留守番をしているのだという。[p. 3451. 8～10]

②5娘さんも会社をやめて新坊と一緒に働きたい、  
[p. 3471. 16]

⑳「清潔に澄んだ瞳には屈託のない若さがたたえられていて、」「凜とした口調の中に通っている弟への愛情にも、素直な感傷がうかがわれ」る「娘さん」は、㉑「愛染祭」の由来を「私」に教えたり、㉒「私」の探していた「レコード」が見つかったことを「葉書」で知らせてくれたり、㉓工場から無断で帰ってきた「新坊」を送り返す「主人」の「留守番」をしたりする。そして、最後は「新坊」のためにわざわざ「会社をやめて新坊と一緒に働く」決断をするのである。〈健康的〉で〈しっかり者〉で〈弟思い〉のつつましやかな女性である。

(d). 新坊

「新坊」はこの小説に印象的に登場する。この少年の描写の具体性は「娘さん」と対照的である。

①6ただ今とランドセルを背負った少年がはいって来て、新坊、挨拶せんかと主人が言った時には、もうこそこそと奥へ姿を消してしまっていた。どうも無口な奴でと、しかし主人はうれしそうに言い、こんど中学校を受けるのだが、父親に似ず無口だから口頭試問が心配だと、急に声が低くなった。[p. 3421. 1～5]

①9帰り途、ひっそりと黄昏れている口縄坂の石段を降りて来ると、下から登って来た少年がピョンと頭を下げて、そのままピョンピョンと行ってしまった。新聞をかかえ、新坊であった。その後私は新坊が新聞を配り終えた疲れた足取りで名曲堂へ帰って来るのを、何度か目撃したが、新坊はいつみても黙って硝子扉を押してはいって来ると、そのまま父親にも口を利かずにこそこそ奥へ姿を消してしまうのだった。レコードを聴いている私に遠慮して声を出さないのであろうが、ひとつにはもともと無口らしかった。眉毛は薄い、顔立ちはこじんまりと綺麗にまとまって、半ズボンの下にむきだしにしている足は、女の子のように白かった。[p. 3431. 7～14]

②0新坊はつい最近名古屋の工場へ徴用されて今はその寄宿舎にいる [p. 3441. 8]

②2一昨夜寄宿舎で雨の音を聴いていると、ふと家が恋しくなると、父や姉の傍で寝たいなと思うと、今までになかったことなのに、もうたまらなくなり、ふらふら昼の汽車に乗ってしまったのやいう言い分けを、しかし父親は承知せずに、その晩泊めようと

せず、夜行に乗せて名古屋まで送って行ったということだった。[p. 3451. 10～14]

②3訓されて帰ったものの、やはり家が恋しいと、三日にあげず手紙が来るらしかった。[p. 3461. 7～8]

②4新坊がまたふらふらと帰って来て、叱られて帰って行った [p. 3461. 13]

「新坊」は①9「顔立ちはこじんまりと綺麗にまとまって」いる「半ズボンの下にむきだしにしている足は、女の子のように白」い、①6「無口」で〈おとなしい〉少年であり、②0「名古屋の工場へ徴用されて」「寄宿舎」に入っても、②2「ふと家が恋しくなると、父や姉の傍で寝たいなと思う」ような〈あどけなさ〉の残る〈甘えん坊〉である。

「矢野名曲堂」の一家は、〈甘えん坊〉で〈おとなしい〉「新坊」を暖かく見守りながら、時に〈厳しさ〉をもって接しながらも、〈子ども思い〉〈弟思い〉の愛情によりしっかりとつながりあう家族、とみなすことができよう。しかし、時代は太平洋戦争下、昭和18年である。「新坊」は②0「名古屋の工場へ徴用され」て、この美しい家族は時代に引き裂かれてしまうかに見える。しかし、②5「一家をあげて新坊のいる名古屋へ行き、寝起きを共にして一緒に働く」ことで、一家は絆を保ち続けようとするのである。「私」はそのような〈矢野一家〉の姿に接し、まるで〈過去の「私」〉の果たせなかった「想い」をこの一家に重ねるように、〈叙情〉するのである。

稿者は、実際の授業において、ここまでの授業内容に基づき、この小説の主題を、こうまとめることにした。

《戦争における国家の施策によって引き裂かれながらも、けなげに心を通わせあう家族の愛情への、同じ大阪の下町に育った「私」の回顧的な共感》

「詩情をたたへた、うつくしい物語」＝「スキートな物語」である。

ii). 初出誌のテキストにおける主題

しかし、単行本のテキストを底本にした『木の都』を読んでいて、どうしても腑に落ちない点がある。それは、小説末尾の「私」の「思い」である。前項の(a)の終りで指摘しておいたが、さらに小段落②5の後半部から②6の末尾までを引用すると、それは次のような「思い」である。（「思い」の具体的な内容を破線部で示した。）

②5②6 [p. 3471. 11～p. 3481. 6]

…新坊が家を恋しがって、いくら言いかかせても

帰りがるので、主人は散々思案したあげく、いっそ一家をあげて新坊のいる名古屋へ行き、寝起きを共にして一緒に働けば新坊ももう家を恋しがることもないわけだ、それよりほかに新坊の帰りがる気持をとめる方法はないし、まごまごしていると、自分にも徴用が来るかも知れないと考え、二十日ほど前に店を畳んで娘さんと一緒に発ってしまった、娘さんも会社をやめて新坊と一緒に働きたい、なんといっても子や弟いうもんは可愛いもんやさかいなと、もう七十を越したかと思われる標札屋の老人はぼそぼそと語って、眼鏡を外し、眼やにを拭いた。私のもとこの町の少年であったということには気づかぬらしく、私ももうそれには触れなくなかった。

口縄坂は寒々と木が枯れて、白い風が走っていた。私は石段を降りて行きながら、もうこの坂を登り降りすることも当分あるまいと思った。青春の回想の甘さは終り、新しい現実が私に向き直って来たように思われた。風は木の梢にはげしく突っ掛っていた。

そのように「私」が「思う」ようになったのは、〈矢野一家〉の名古屋への引っ越しによるものである。引っ越しの理由は、「新坊」にたびたび工場から帰ってこさせないためであり、「主人」が「徴用」にかからないため、ということであった。そうであるなら、なぜ「私」は、上記引用の破線部のような、あらたまった、引き締まった「思い」になる必要があるのか。

この部分の「思い」は、まるでここまでの「私」の〈叙情〉を否定しているかのごとくである。V章で述べた「二重写し」の構造に照らして言えば、この物語Dの展開を動因として、物語Aは物語Bを積極的に否定しようとしている。〈去年の「私」〉が、〈過去の「私」〉の「なつかしい」「思い」を否定せねばならない、という「思い」を抱くところで、この小説は幕を閉じるのである。

なぜ末尾になって、この小説は、自らの〈叙情〉を否定しようとするのか。しかも、それは読者にとって、理由が釈然としない唐突さである。

この疑問を生徒に投げかけてみると、生徒も同様に、分からない、と言う者が多くいるが、中には、分からないことはない、という返事が返ってくることもある。〈矢野一家〉もそんなふう<sup>1</sup>に気を引き締めて働こうとしているのだから、「私」も甘い〈叙情〉に浸ってばかりはいられない、しっかり生きていかねばならないと思ったのだ、と。

なるほど、そんなふう<sup>1</sup>に読めるのか、と感心したりもするのである。考えてみれば、小説の読者とい

うものは、作品世界を所与のテキストから組み立てて、その世界を読むのである。当然のことだ。読者が小説になにかしら〈主題〉らしきもの、〈この小説はいったい何がしたいのか〉を読み取ろうとするならば、無理にでも(!)そのテキストに整合性を与えて読むことになる。

しかも、やっかいなことに、この「私」の「思い」が小説の、いわば結論部分である末尾に現われることである。小説の主題を担うと思われるのは、やはり物語Aの〈去年の「私」〉であろう。その〈去年の「私」〉が小説の末尾において、唐突に〈叙情〉を否定するのである。この小説を「詩情をたたへた、うつくしい物語」＝「スキートな物語」と読むためには、この末尾の部分に目をつぶるしかないのではないか。それは、小説の読みとして正当なことであろうか。

ここで、この小説が発表された当時、この小説の時評として、次のようなものがあったことを見てみたい。

青柳優「三月時評」（1944年4月1日『新潮』第41巻第4号新潮社）

織田作之助「木の都」（新潮）は少年の頃住んでみた大阪の或る街を久し振りに訪れ、旧知に巡り合ふのだが、ここでは懐旧の情よりは、その知人一家の生活の更新を中心に、それをも市井風景の一齣にしてゐる処、この短篇の軽い味が出てゐる。

「懐旧の情よりは、その知人一家の生活の更新を中心に」とある。「懐旧の情」、つまり、今まで見てきた、この小説の主たる評価である、「大阪へのノスタルジア」や「詩情をたたへた、うつくしい物語」ということよりも、「生活の更新」<sup>2</sup>が「中心」と述べているのである。

同時代評がこのような読み方をするのには、理由があろう。少なくともこれまでのところ、「知人一家」である〈矢野一家〉に「生活の更新」などと呼べるほど威勢のいいものは読み取ることができなかった。（末尾の「引っ越し」も「更新」などという積極的な意味があるとは考えられない。）

そこで、評者・青柳が読んだ1944年、つまり太平洋戦争がそろそろ末期と呼べる状態になりつつある昭和19年3月に文芸誌『新潮』に掲載された「木の都」のテキスト（以下、初出テキストと呼ぶ。）を確認してみる。すると、小さなものが多いが、かなり多くの異同があることが分かる。「表 織田作之助「木の都」本文異同表」に示したものが、それである。（なお、この表も1998年の学会発表のため



表 織田作之助「木の都」本文異同表

異同番号	【初出】『新潮』第41巻第3号<42~49頁> (昭和19年3月1日新潮社)	【単行本】『霧飛佐助』<171~190頁> (昭和21年1月31日三島書房)	異同箇所	異同箇所
①	43 上 2 社社や寺院を中心に生まれた町	172 4 寺院を中心に生まれた町	異	同 箇所
②	7 大阪の下町の匂い	7 大阪町人の自由な下町の匂い	異	同 箇所
3	11 坂を西へ降りて行くと	11 坂を西へ降りて行くと	同	同 箇所
4	8 制服のひとをみて、	174 1 制服のひとをみて、	異	同 箇所
⑤	12 嵐風の吉田へ移ってしまつた。	4 吉田へ移ってしまつた。	異	同 箇所
6	8 私の中学校△指導選手の派遣を	175 6 私の中学校指導選手の派遣を	異	同 箇所
7	17 そのことを懸念しながら、	13 そのことを懸念しながら、	異	同 箇所
⑧	2 寺も家も木も昔のままに	176 6 寺も家も木も昔のままに	異	同 箇所
9	8 風呂屋の隣に床屋があつた。	11 風呂屋の隣に床屋があつた	異	同 箇所
10	10 私はおやつと思つた。	12 私はおやつと思つた。	異	同 箇所
11	9 ベートン	178 4 ベートン	異	同 箇所
12	12 食堂の血流ひをしたり	181 5 食堂の血流ひをしたり	異	同 箇所
13	14 良い材料を使った美味いものを	6 良い材料を使った美味いものを	異	同 箇所
14	7 まだまだ……と言つてゐるところへ、	182 6 ……まだまだと言つてゐるところへ、	異	同 箇所
15	20 私はひとり笑つた。	183 3 私はひとり笑つた。	異	同 箇所
16	21 つまりは私の第二の青春の	4 つまり私の第二の青春の	異	同 箇所
17	4 競争がはげしかつたのか、	8 競争がはげしかつたか、	異	同 箇所
18	6 私を驚かせた。	10 私を驚かせた	異	同 箇所
⑨	9 立派に世間へ通るしお国の役に立つ、	12 立派に世間へ通るし人の役に立つ、	異	同 箇所
20	18 父親にも口を利かずに	184 7 父親にも口を利かずに	異	同 箇所
21	23 新坊が帰つて来ると	11 新坊が帰つて来ると	異	同 箇所
22	6 私は暫く名曲堂へ	185 3 私は暫く名曲堂へ	異	同 箇所
⑩	10 氏祖の生国魂社の夏祭りであつた。	6 生国魂の夏祭りであつた。	異	同 箇所
⑪	14 新坊はつひ最近名古屋の工場へ仕事として働かに行き、今はその	8 新坊はつひ最近名古屋の工場へ仕事として働かに行き、今はその	異	同 箇所

※ 傍線部が異同箇所。※印をつけたものは、前西和彦『織田作之助文藝事典』(平成4年7月20日)和泉書院)の「木の都」(原岡千鶴)の項に、初出テキストと『定本織田作之助全集第五巻』(昭和51年4月25日文芸春秋刊)所収テキストの異同として、すでに指摘がある。

異同番号	【初出】『新潮』第41巻第3号<42~49頁> (昭和19年3月1日新潮社)	【単行本】『霧飛佐助』<171~190頁> (昭和21年1月31日三島書房)	異同箇所	異同箇所
⑫	43 上 2 社社や寺院を中心に生まれた町	172 4 寺院を中心に生まれた町	異	同 箇所
⑬	7 大阪の下町の匂い	7 大阪町人の自由な下町の匂い	異	同 箇所
14	11 坂を西へ降りて行くと	11 坂を西へ降りて行くと	同	同 箇所
15	8 制服のひとをみて、	174 1 制服のひとをみて、	異	同 箇所
16	12 嵐風の吉田へ移ってしまつた。	4 吉田へ移ってしまつた。	異	同 箇所
17	8 私の中学校△指導選手の派遣を	175 6 私の中学校指導選手の派遣を	異	同 箇所
18	17 そのことを懸念しながら、	13 そのことを懸念しながら、	異	同 箇所
19	2 寺も家も木も昔のままに	176 6 寺も家も木も昔のままに	異	同 箇所
20	8 風呂屋の隣に床屋があつた。	11 風呂屋の隣に床屋があつた	異	同 箇所
21	10 私はおやつと思つた。	12 私はおやつと思つた。	異	同 箇所
22	9 ベートン	178 4 ベートン	異	同 箇所
23	12 食堂の血流ひをしたり	181 5 食堂の血流ひをしたり	異	同 箇所
24	14 良い材料を使った美味いものを	6 良い材料を使った美味いものを	異	同 箇所
25	7 まだまだ……と言つてゐるところへ、	182 6 ……まだまだと言つてゐるところへ、	異	同 箇所
26	20 私はひとり笑つた。	183 3 私はひとり笑つた。	異	同 箇所
27	21 つまりは私の第二の青春の	4 つまり私の第二の青春の	異	同 箇所
28	4 競争がはげしかつたのか、	8 競争がはげしかつたか、	異	同 箇所
29	6 私を驚かせた。	10 私を驚かせた	異	同 箇所
30	9 立派に世間へ通るしお国の役に立つ、	12 立派に世間へ通るし人の役に立つ、	異	同 箇所
31	18 父親にも口を利かずに	184 7 父親にも口を利かずに	異	同 箇所
32	23 新坊が帰つて来ると	11 新坊が帰つて来ると	異	同 箇所
33	6 私は暫く名曲堂へ	185 3 私は暫く名曲堂へ	異	同 箇所
34	10 氏祖の生国魂社の夏祭りであつた。	6 生国魂の夏祭りであつた。	異	同 箇所
35	14 新坊はつひ最近名古屋の工場へ仕事として働かに行き、今はその	8 新坊はつひ最近名古屋の工場へ仕事として働かに行き、今はその	異	同 箇所

※ 傍線部が異同箇所。※印をつけたものは、前西和彦『織田作之助文藝事典』(平成4年7月20日)和泉書院)の「木の都」(原岡千鶴)の項に、初出テキストと『定本織田作之助全集第五巻』(昭和51年4月25日文芸春秋刊)所収テキストの異同として、すでに指摘がある。

に作成したものであり、単行本のテキストの頁行は初刊本『猿飛佐助』のものである。やはり、授業ではこのまま配布している。)\*8

ここで、この異同の背景に、太平洋戦争の終戦という時代の大転換があることを十分に意識する必要がある。初出テキストの発表当時に是とされていたものが、初刊本刊行時には否定され、その逆もあつたということである。単純化するというならば、君主制国家の軍国主義の時代から占領下の民主主義の時代へということになる。この異同には、単純な誤記、重複、不整合を訂正したもの以外に特徴的なものとしては、次のようなものがある。（以下に示す初出テキストのうち初刊本で削除されている箇所を下線をほどこし、追加されている箇所は《 》で括った。また語句が、変更されている箇所は破線を引いてあとの〔 〕内に初刊本の変更後の語句を示した。なお、引用文冒頭の①～⑭は対応する授業のテキストの小段落番号であり、末尾の〔 〕内はその頁行である。異同を分かりやすくするため、初出テキストも旧仮名遣いを新仮名遣いに、旧字体を新字体に改めてある。）

\* 神道への配慮

⑭七月九日は氏神の生国魂神社の夏祭であった。（中略）レコードを聞くのは忘れて、ひとり生国魂神社〔祭見物〕に行った。〔p. 3441. 5～10〕

\* 民主主義への配慮

④もう元禄の昔より大阪《町人》の《自由な》下町の匂いがむんむん漂うていた。〔p. 3341. 8～9〕

\* 戦時体制への配慮

⑱しかし男の子は学問がなくても働くことさえ知っておれば、立派に世間へ通るしお国〔人〕の役に立つ、〔p. 3431. 3～4〕

⑳そして祭の夜店で何か買ってやることを、ひそかに楽しみながら、わざと夜をえらんで名曲堂へ行くと、新坊はつい最近名古屋の工場へ少年工として働きに行き、〔徴用されて〕今はそこの寄宿舎にいるとのことであった。新聞配達をしているよりもそうして工場働く方がどれだけお国の役に立つかも知れないと思い、進んでそうさせた、大阪にも工場はあるが、しかし可愛い子には旅をさせた方がよいと、わざわざ名古屋へやったのだと、主人らしい意見であった。私は名曲堂へ来る途中の薬屋で見つけたメタボリンを新坊に送ってやってくれと渡して、〔p. 3441. 7～10〕

㉒聴けば、新坊が昨夜工場に無断で帰って来たのだ。仕事がいやで帰って来たのではない、仕事もおもしろいし、寄宿舎も好きで、盆にも帰らずに働い

たくらいだが、一昨夜寄宿舎で雨の音を聴いていると、ふと家が恋しくなつて、父や姉の傍で寝たいなと思うと、今までになかったことなのに、もうたまらなくなり、ふらふら昼の汽車に乗ってしまったのやいう言い分けを、しかし父親は承知せず《に》、お前のような者でも一日工場を休めばそれだけ増産が遅れるんだと叱りつけて、その晩泊めようとせず、夜行に乗せて名古屋まで送って行ったということだった。一晩も泊めずに帰ってしまったかと想えば不憫でもある〔でした〕が、しかし今日の時局ではそうするのが当然ですわという娘さんの口調の中に、私は二十五の年齢を見た。〔p. 3451. 10～15〕

㉓新坊が家を恋しがって、いくら言いきかせても帰りがるので、主人は散々思案したあげく、いっそ一家をあげて新坊のいる工場へはいり〔名古屋へ行き〕、寝起きを共にして一緒に働けば新坊ももう家を恋しがることもないわけだ、それよりほかに新坊の帰りがたがる気持をとめる方法はない《し、まごまごしていると、自分にも徴用が来るかも知れない》と考え、二十日ほど前に店を畳んで娘さんと一緒に名古屋へ行つて〔発つて〕しまった、娘さんも会社をやめて新坊と一緒に働きたい、〔p. 3471. 11～16〕

初出テキストに基づくと、異同はさほどに大きくないにもかかわらず、前項で確認した登場人物のうち「主人」「娘さん」「新坊」の人物造形は初刊本を底本とする授業のテキストのもの、やや、いや、ずいぶん異なっている。

(b). 主人

「新坊」は㉒「徴用されて」「名古屋の工場へ」行ったのではない。「主人」が「進んでそうさせた」のである。その理由は、「新聞配達をしているよりもそうして工場働く方がどれだけお国の役に立つかも知れない」というものであり、「大阪にも工場はあるが、」「わざわざ名古屋へやった」というのである。また、「新坊」が㉒「工場に無断で帰って来た」ときも、「お前のような者でも一日工場を休めばそれだけ増産が遅れるんだと叱りつけ」る。（子ども思い）の人情家にはちがいないが、私事よりも何より「お国」のためを考える（国家優先）の姿勢が顕著である。したがって、一家で㉓「名古屋へ行く」のも、「まごまごしていると、自分にも徴用が来るかも知れない」からなどでは決してなく、明確に「新坊のいる工場へはいり」ることが目的なのである。

(c). 娘さん

それは「主人」に限ったことではない。「娘さん」



もまた、②「工場に無断で帰って来た」「新坊」のことを「一晩も泊めずに帰ってしまったかと想えば不憫でもあるが、しかし今日の時局ではそうするのが当然ですわ」ときっぱり言うのである。だからこそ「私」はそこに銃後に生きる女性として「二十五の年齢を見た」というのだろう。「娘さん」もまた、私事である〈弟思い〉であるよりも、〈国家優先〉の姿勢をはっきりと示す。

(d). 新坊

では、〈甘えん坊〉であったはずの「新坊」はどうか。先に述べたように「新坊」が⑩「名古屋の工場へ」行ったのは「徴用」ではない、明示はされていないが、父親の強い勧めがあったことは想像できるにしろ、おそらく志願したのであろう。しかし、「新坊」は②「工場に無断で帰って来た」りもするのだが、それとても「仕事がいやで帰って来たのではない、仕事もおもしろいし、寄宿舎も好きで、盆にも帰らずに働いたくらいだ」と言うのである。「新坊」も彼なりに「お国」に尽くそうと努力しているわけで、決して〈甘えん坊〉であるだけではないのである。

したがって、小説の末尾で〈矢野一家〉が「一家をあげて新坊のいる工場へはい」るのは、私事のためだけではないのである。むしろそれは、「時局」において〈国家〉が求めている理想の〈臣民〉としての家族の姿であったと言ってもいい。織田はこの小説を原作の一つとして映画のシナリオ「四つの都」（1944年4月1日『映画評論』第1巻第4号日本映画出版）を執筆しているが、<sup>99</sup>そのラストシーン近くに、主人公が「矢野名曲堂」を訪ねると、「戸締りがしてある。／『時局に鑑み廃業、一家を挙げて産業戦士に転向仕候』／と書いた貼紙がしてある。」とある。まさに〈矢野一家〉は「産業戦士に転向」する一家なのである。

このように初出テキストを見てくると、「私」がこの小説の末尾で、⑤「もこの町の少年であったということ」には「触れなくなかった。」と思ったり、⑥「もうこの坂を登り降りすることも当分あるまいと思った。青春の回想の甘さは終り、新しい現実が私に向き直って来たように思われた。」と語るのも納得がいく。まさに、この末尾にこそ、この小説の主題が託されていると読めるのである〈過去の「私」〉は〈過去の「私」〉から生れてくる〈叙情〉を否定し、「新しい現実」に向かっていくのだ、というように。

授業において稿者は、『木の都』の初出テキスト

における主題を次のように提示しておいた。

《戦争という時局に応じ、国家のため増産のために困難を乗り越え積極的に工場で働こうとする家族に接し、国家的な「新しい現実」と直面しようとする「私」の決意》

つまり、主題は、「新しい現実」に応じる「生活の更新」なのである。

VII. 『木の都』から見る、小説家・織田作之助

『木の都』が初出テキストのようなものとして書かれた背景を確認しておきたい。

1944（昭和19）年になるとアメリカとの戦争も2年を越え、日本の物的・人的資源はいよいよ枯渇してくる。図2の新聞記事にあるように、前年9月に「女子でも代替できる軽易な」17の職種への「男子就業禁令」が厚生省から出され、その転職期限が「現金出納係」「小使、給仕」「電話交換手」等9職種1月15日、「事務補助者」「料理人」「理髪師、髪結、美容師」等6職種3月15日、「車掌」「踏切手」5月15日とされていた。<sup>10</sup>



図2 『朝日新聞』1944年1月14日夕刊

また、1月18日に厚生省は「緊急国民勤労働員方策要綱」を發表し、図3の新聞記事のように、「現存の居住地主義的徴用制度のほか、職域徴用制度を創設」、「学校在学者の勤労働員」、「女子の勤労働員を促進拡大」などの「勤労働員の拡大」を決定する。

まさに『木の都』の〈語る「私」〉は、おそらくはこの1944年1月中旬に作者・織田作之助とともに



に身を置き、四つの物語を語っているのである。



図3 『朝日新聞』1944年1月19日

このように見てくると、初出テキストにおける「矢野名曲堂」一家は、「矢野精養軒」店主で元「料理人」の「主人」が「名曲堂」という戦時に不要な職種を捨て、おそらくは「事務補助者」であっただろう「娘さん」が会社をやめて（女子の就業は禁止されてはいないが）、「徴用」ではなくむしろ志願して「居住地」ではない工場に小学校を卒業したばかりの「新坊」とも働きに行く家族であり、まさに上に述べた二つの国家の施策が〈臣民〉に求める理想の家族として描かれているということが分かるのである。そのような〈矢野一家〉と交流することで、〈去年の「私」〉は〈過去の「私」〉の〈叙情〉を振り切り、「新しい現実」へと向かうのであった。『木の都』は発表時においては、まさに時局に即し、国家の施策に寄り添う小説であり、「詩情」を捨てることを主題とした作品であったのである。

1945年8月15日、日本は太平洋戦争に敗北する。『木の都』が寄り添った国家は失われる。しかし、この作者は、『木の都』を初めて単行本に収録する際に、ほんの数行を削除したり、加筆したりするだけで、初出時の主題を見事に消し去り（末尾の違和感が残ったものの）、この小説を「詩情をたたへた、うつくしい物語」＝「スキートな物語」として生きのびさせた。その手腕は、やはり見事というほかはない。ある評者には、「美しさからいえば、織田作品のなかで、これがもっともすぐれている。」とすら、言わしめるのだから。

このような織田作之助の小説家としての創作姿勢をどう評価するかは、もちろんさまざまであろう。

アメリカ占領軍の検閲が影響していたことも、具体的な程度は分からないが、十分に考えられる<sup>\*11</sup>。思想性の希薄な職業作家の態度と揶揄することも可能だろうし、困難な時代をたくましく生きのびた芸術至上主義者として評価することもできるかもしれない。しかし、そのような判断は、どちらにしろ、表現者自身にとっては意味のないことであろう。織田はただ、自身の表現したいものを環境の許す限り最大限に表現できるように、そしてそれによって実生活において人並みに生活ができるように、努力したにすぎない。

それはともかく、もし稿者が授業において、本作をこのように読むことによって伝えたかったことがあるとすれば、それは戦争という環境が、織田のそのような努力を、ほかのどの時代における表現者のものよりも、厳しいものにしていただろうということである。ここで考察したような本作における主題の入れ替えを、織田がどのような「思い」で行ったのかは定かではない。ただ、素朴に言うのであるが、戦争は、そのような「思い」を、表現の当事者のみならず、その表現を受け取ろうとする者にまで、無用で不条理な重荷として、背負わせるものなのである。

#### おわりに

IV章にも述べたが、織田作之助の『木の都』についての作品研究は、稿者が学会発表を行った四半世紀前の時点では、皆無といってもよかった。近年いくつかの論文が発表されていて<sup>\*12</sup>、稿者も勉強させてもらってはいるが、残念ながら、この『木の都』の授業には反映させることができないでいる。本稿で述べてみたことも、もはや目新しいものではないかもしれない。

ただ、本稿を最後まで書き終えてみて、この長い「授業ノート」をとりあえず、まとめられたことに、ひとまずの安堵感を感じている。ともかくこれで、稿者が長年専門の研究対象としてきた織田作之助の作品のうち、高校の国語科教員の立場で教材として扱ってきた二つの小説、『馬地獄』と『木の都』の授業について、双方とも活字として残すこと（この表現が古びたものと受け取られるだろうことは、今となっては残念なことである。）ができたのであるから。30年ほど前に活字にした『馬地獄』の教材化についての拙稿<sup>\*13</sup>と同じ「一現代文分野における『大阪の文学』の教材として一」という、やや内容にそぐわない副題を表題に付したのも、そのような思いからである。

おそらく、本稿は稿者が考える以上に読みづらい

ものとなっていると思う。テキストの本文の同じ箇所を何度も引用したり、同趣旨の論述を繰り返したりして、冗長の誇りをまぬかれないものと反省しきりである。もともと授業の板書案でしかない「授業ノート」を論文まがいに立ち上げる作業であったので、文章化するだけで精一杯であった。ご寛恕願いたい。

「はじめに」にも書いたように、昭和文学でも決して本道を歩んだ作家ではないと思われる、織田作之助という大阪出身の作家の文学についての論考だけを、もう40年あまり、細々と書き継いできた。40年というのは、織田の作家生活の5倍の長さである。織田の生涯は33年と3か月足らずであったから、それよりもまだ長い。才有る者と才無き者の懸隔と言え、それまでであるが、それにしても稿者の積み上げてきたものは、研究対象の残したものと較べて、あまりに貧相である。

このように、まとまった文章を書くたびに、「これが最後になるかもしれない」という思いが現実味を帯びてくる。そう思いながらも、書ききれていないことが、まだいくらかはある気がしている。すべて吐き出してしまう必要はないかもしれないが、腹の中にため込むのも苦しいので、もう少しは書くことになるかもしれない。

最後になるが、英文のtitleとabstractの作成には、本校英語科教諭の加藤晃浩氏の手を煩わせた。記して深く感謝の意を表したい。

(2024. 1. 28)

## 注

- \*1 拙稿「織田作之助「馬地獄」の教材性—現代文分野における「大阪の文学」の教材として—」（1995年3月20日『研究紀要』第27集大阪教育大学附属高等学校池田校舎）
- \*2 「不具合な点」というのは内容に致命的な不備があるというのではなく、論文発表するために確認すべき事項が、その当時容易には実行できないものであったためである。この学会発表の内容に基づいて、「木の都 | 織田作之助」（1999年3月10日東郷克美・吉田司雄編『近代小説〈都市〉を読む』双文社）という短文を書いている。
- \*3 この書籍は、大阪府河内長野市の印刷会社（長野タイプ）が実質的な出版元であり、現在その購入は出版元に直接問い合わせる必要がある。稿者が10年前に授業用に購入した際に、すでに在庫は僅少となっているもようであった。
- \*4 この引用部分の破線部「思い」は実は、今回使

用している岩波文庫『夫婦善哉正統他十二篇』では、「想い」となっている。稿者が初刊本『猿飛佐助』に当たって確認としたところ、「思ひ」となっているので、あえてテキストを訂正しておく。この部分は稿者の論述上、要の一つとなる部分である。なお、実際に授業で使用した『大阪の文学（近現代編）』では、「思い」と初刊本のままになっている。

- \*5 本稿の趣旨とは関わりはないのだが、稿者は、ここで「二重写し」という言葉が使われるのは、作者の傾倒していた梶井基次郎の『檸檬』の作中にある「私の錯覚と壊れかかった町との二重写しである。」という表現が影響していると推測している。
- \*6 このような人物像が織田の父・鶴吉の人物像に酷似していることを大谷晃一が『生き愛し書いた織田作之助伝』（1973年10月8日講談社）で指摘している。
- \*7 この語については、同時代における相応の意味あいがあるものと考えられる。新体制運動や国民精神総動員との関連を予想するが、具体的に他の用例にはあたっていない。後の機会に譲りたい。
- \*8 これらの異同の主なものは、稿者の学会発表以前に増田周子「木の都」（『織田作之助文藝辞典』前掲）に具体的な指摘があった。
- \*9 このシナリオは川島雄三の監督第一作『帰って来た男』として同年に松竹で映画化され、公開された。
- \*10 職種名は「厚生省告示五百五十六号」（1943年9月23日『官報』第5011号）による。
- \*11 この点については、具体的にどのようなものであったかを学会発表当時、横手一彦『被占領下の文学に関する基礎的研究 資料編』（1995年1月1日武蔵野書房）にあたって確認したが、本作の事例は見当たらなかった。「はじめに」の注\*2「不具合な点」とはこのことである。現在では検閲資料のデータを確認することは比較的容易にできるはずだが、稿者の怠慢ゆえ、未探索のままである。
- \*12 たとえば、浅野洋「織田作之助「木の都」—幻影の〈故郷〉の町から」（2012年3月21日『近畿大学日本語・日本文学』）、斎藤理生「織田作之助『木の都』の〈大阪〉—歴史・記憶・架空—」（2021年12月30日『文学・語学』）などがある。
- \*13 注\*1に同じ。

## Class Notes on “Kinomiyako” by Oda Sakunosuke: A Teaching Material of “Osaka Literature” in the Field of Modern Japanese Literature

MIYAGAWA Yasushi

**Abstract:** Oda Sakunosuke's 'Kinomiyako' consists of four compelling stories, resulting in a poetic and beautiful storytelling. Examining its first release, another theme emerges—the quest for a new life during the Pacific War.

**Key Words:** Modern Japanese Literature, Osaka, Burai-ha, the Pacific War, Literature Education